

興福寺中金堂院の調査

—第369次

はじめに

今回の調査は、興福寺第1期境内整備事業における回廊周辺排水施設関連工事の事前調査である。

興福寺中金堂院ではこれまで中金堂、中門及び東面回廊の調査を実施し、各建物の規模、基壇外装を確認している（『興福寺 第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報 I～IV』、以下『概報 I～IV』とする）。

今回実施した調査では、3ヶ所の調査区を設けた。このうち主調査区（西Ⅰ区）は既に確認した南面回廊東側の暗渠を中門の中軸線で西に折り返した位置にあたる。他の2ヶ所（西Ⅱ区・東区）は、中門南面の参道上に位置する（図142）。

今回の調査は、設置する排水施設が基壇面以下には及ばないことから、調査区における遺構面の高さを確認することを目的として実施し、南面回廊西側の暗渠および南面・西面回廊の両基壇について部分的な調査を実施することとした。調査は2004年3月3日に開始し、3月11日に終了した。調査面積の合計は32.8㎡である。



図141 雨落溝SD7420・SD8802と暗渠SD8800（北東から）

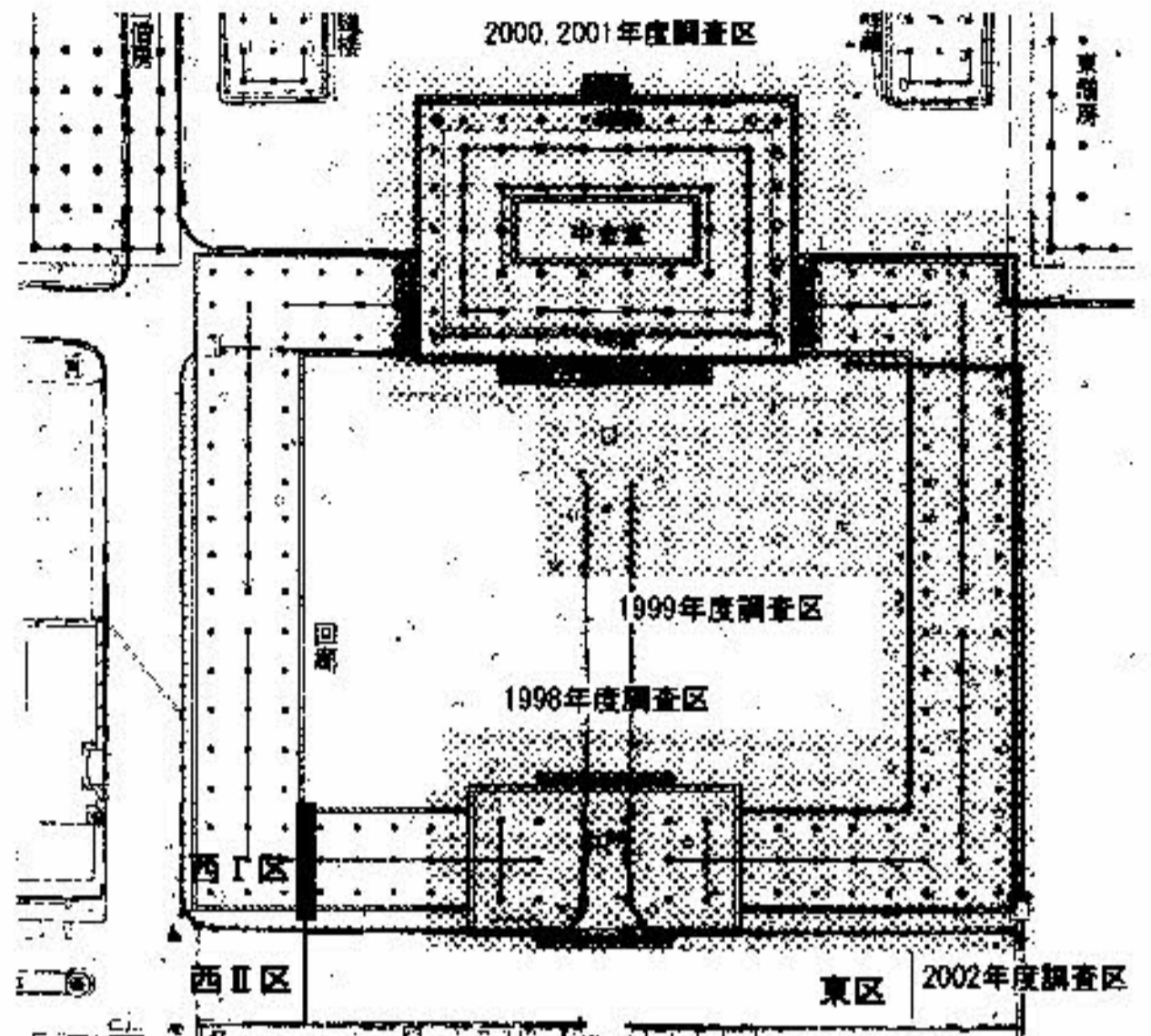


図142 第369次調査位置図

検出遺構

西Ⅰ区 南北12.8m、東西2mの調査区を設定し、現地表下5～20cmで、南面回廊の西側暗渠SD8800、南面回廊SC7417と西面回廊SC8804の基壇土を検出した。遺構面の標高は、調査区北端で95.06m、南端で94.85mである。近代の遺物を含む溝SD8801が調査区中央に位置し、溝底部で黄茶褐色土（地山）を確認した。

この断面でSC7417、SC8804の築成状況を観察すると（図143）、地山上面に黄褐色土（整地土）で平らにし、この上にSC7417では1層、SC8804では3層の黄灰褐色土（基壇積土）を確認した。現状の基壇高は地山から約50cmである。整地土の上では、SD8800の底石を検出した。底石は幅約40cm、厚さ約20cmで、側石は抜き取られていた。なお、底石両脇に凝灰岩片を多数含む黄褐色砂質土層を確認でき、この上面は基壇土で覆われていた。

一方、調査区北の断割箇所ではSC7417、SC8804の内庭側の基壇外装SX7418、SX8803と雨落溝SD7420、SD8802を検出し、調査区北と中央の断割箇所ではSD8800の底石、側石を検出した。SX7418は地覆石と羽目石の一部、SX8803は地覆石のみ検出した。地覆石の幅は約20cm、長さ約40cmで、羽目石の幅は約5cmである。SD7420は溝幅約45cm、SD8802は溝幅約40cmで、それぞれ内庭側に川原石および凝灰岩を立て、底部に川原石を並べる。底石の上面はSD7420の東端（94.87m）とSD8802の北端（94.90m）で高く、南西隅（94.81m）に向かって低くなる。

SD8800の側石は幅約12cm、長さ約30cmで上部が欠け

表20 第369次出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数
6671(興540)	A	1	興909		1
巴		1			
軒丸瓦計		2	軒平瓦計		5
	丸瓦		平瓦		凝灰岩
重量	14.1kg		32.0kg		100.6kg
点数	161		375		103

る。底石は一辺約40cmの正方形の切石で、調査区中央ではその長さを確認できなかつたが、幅は約40cmで両側に5cm程の切り欠きを持ち、上面には著しい風化がみられた。北端の底石は幅約30cm、長さ約50cmで、北縁と西縁を隣あう地覆石と揃え、中金堂院内庭側南西隅の交点をなす。また側石はSX7418の地覆石と羽目石とともに基壇土を掘り込み、一連に据え付けられていることを確認でき、改修の痕跡は見あたらなかつた。

西Ⅱ区・東区 西Ⅱ区は南北9.5m、東西0.4mの調査区で、東区は南北8.6m、東西0.4mの調査区である。地表面から深さ10~40cm程の掘削をおこなつた。浅い掘削のため、遺構は検出できなかつた。

出土遺物

調査区からは土器、金属器、瓦、凝灰岩が出土した。土器はコンテナ1箱程度、金属器は鉄釘2点であり、奈良時代から近代のものを含んでいる。瓦については表20を参照されたい。

まとめ

本調査は部分的な調査ではあつたが、南面回廊西側の暗渠を検出することができた。さらに内庭側の基壇外装と雨落溝を検出し、中金堂院の回廊南西隅の地覆石交点を確定することができた。既に確認した東南隅の交点部の座標を用いて検討すると、南面回廊内庭側の振れは、 $E0^{\circ}19'31''N$ になる。また、今回検出した地覆石および雨落溝は中門北半で検出したものと一連のものと考えることができ、その遺存状況からはB期(『概報I』)のものと推定できる。

なお、SD8800底石両脇にひろがる土層は溝状の遺構になる可能性がある。SD8800北端でみられた基壇土を掘り込み据え付ける暗渠側石の据付状況と一致せず、据付掘形とは考えにくい。このため、中金堂院の造営に際し、暗渠に先行して掘られた溝とも考えることができるが、今回は、部分的な確認に留まつたため、詳細は今後の課題として残された。(清永洋平)

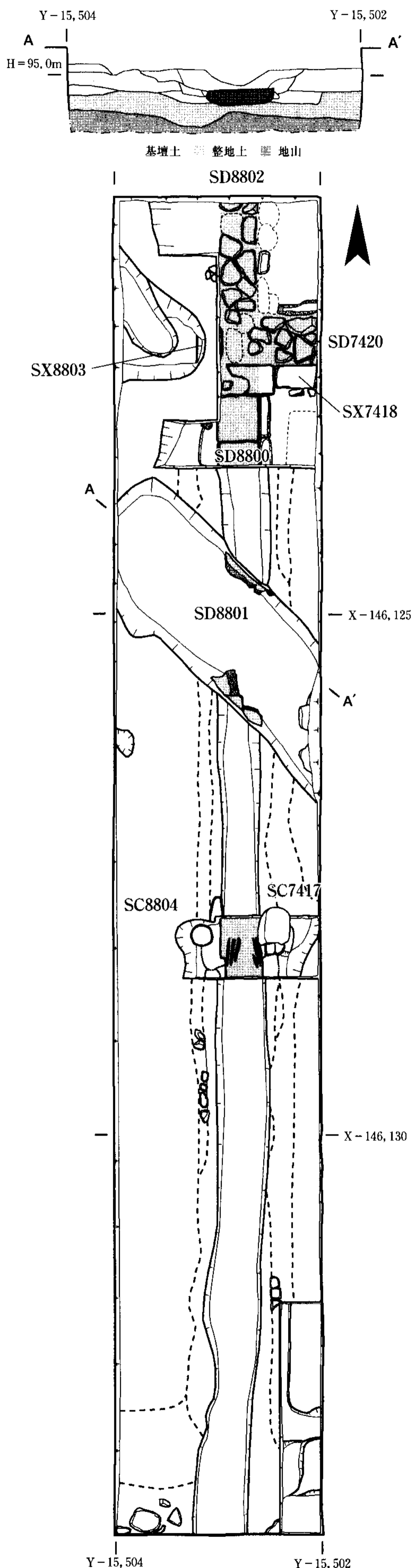


図143 第369次遺構平面図・断面図 1:60